

説教 『神の決意と証言』 山本 護 牧師
聖書 申命記 17:6~7 ヨハネの手紙一 5:6~12

「証しするのは三者で、「霊」と水と血。この三者は一致している(Ⅰヨハネ 5:7~8)」。にわかに意味は解らないが、なんだか心にひっかかる御言葉だ。

かつて喫茶店文化があった頃、知らぬ駅で下車し、勘と嗅覚で小路を進むと、おっいいじゃないか、という喫茶店に辿り着いた。説教する聖書の御言葉に出会う時もこれと似ている。

教会暦を考慮する時期はあるものの、翌週の聖書箇所は決めていない。週が始まり、幾つもの聖書小路をぶらつくうちに、あっここだ、という感じで辿り着いている。

「この方は、水と血を通して来られた方、イエス・キリスト(5:6)」。その方は「水だけではなく、水と血によって来られた(5:6)」と念を押す。

「水」とはイエスの洗礼(ヨハネ 1:32~34)、「血」とは十字架。そして「霊」はこのことを証しする方、「霊」は真理だから(Ⅰヨハネ 5:6)」と重ねていく。

聖霊が証しし、三者もまた一致して証しする(5:7~8)。これらを包み込むのが「神が御子についてなさった証し(5:9)」。すなわち神の証しは、キリストの水と血と霊。

イエスの受洗はこの地平で起り、同じ地平で十字架の赦しが現された。これら神の真実は、聖霊によって私たちに受肉化される、ということか。

讚美歌 21-575 には「さなぎの中から、いのちはばたく」という歌詞があった。幼虫が蛹になると臓器はドロドロに溶け、その混沌から成虫が新たに創造されるそう。確かに芋虫と蝶の形態に連続性はなく、ヤゴと蜻蛉はまったく別の生物に見える。

蛹の混沌のごとくに、水と血と霊によって、私が永遠の命に再創造されるイメージ。

御言葉に従えば、霊と水と血の三者は一致し(5:8)、一致している「御子と結ばれている人にはこの命がある(5:12)」。「この命」とは、神による「永遠の命(5:11)」。

再創造は蛹のような不可思議な混沌だが、これをイメージという「勘」で漠然と掴むだけではない。神から与えられる永遠の命は「御子の内にある(5:11)」から、私たちは「水と血を通して来られた(5:6)」キリストを具体的に信じることができる。

そして真理の霊(5:6)に助けられて「御子と結ばれ(5:12)」、永遠の命に与る(5:11)。

永遠への混沌は不可思議でも、イエスの言葉や業《水》から神の御心は理解しうる。

十字架《血》によって赦されているがゆえに、己が罪を見つめ、悔い改めうる。

「死刑に処せられるには、二人または三人の証言を必要とする。一人の証人の証言で死刑に処してはならない(申命 17:6)」。

民の命が軽んじられていた古代社会にあって、神の律法は人間の命を権力から厳格に守った。

転じてヨハネの手紙では、命に関する神の証言を「霊」と水と血」という一致した三者に保証させている(Ⅰヨハネ 5:8)。与えられる永遠の命は(5:11)、それほどに確かなものなのだ。

「死刑の執行に当たっては、まず証人が手を下し、次に民が全員手を下す(申命 17:7)」。

命に関わる証言はそれほどの重さがある。重い証言の前で、民は傍観者ではいられない。転じて、神もまた命懸けで永遠の命を証しした。

「水だけでなく、水と血によって来られた(Ⅰヨハネ 5:6)」。言うまでもなく「血」、つまり十字架を強調している。これが御子をお遣わしになった神の決意だ。

だから私たちは、もはや傍観者ではいられない。血によって赦され、永遠の命を受け継ぐのだから、命懸けでこれを受ける。



《おまけのひとこと》

奇妙な表現だが 永遠なる 全能なる方の命懸けの決意 十字架はそれほど人の低みに建てられた御子に結ばれ 永遠の命を生きる者は その決意にも与る 同じ証人の列に並んでいるのだから